



Title	大岡昇平における歴史(二)
Author(s)	柴口, 順一
Citation	北海道大學文學部紀要, 42(1), 65-99
Issue Date	1993-11-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33617
Type	bulletin (article)
File Information	42(1)_PR65-99.pdf



[Instructions for use](#)

大岡昇平における歴史(二)

柴 口 順 一

第三章 「歴史小説の問題」

再度の歴史小説論執筆の背景

一連の歴史小説論発表からちょうど十年、一九七四年六月、大岡昇平は『文学界』に「歴史小説の問題」を書く。その背景には、大岡自身その冒頭で述べているように、七十年を前後するいわゆる歴史ブームがあった。各種の「日本の歴史」シリーズが出版され、NHKの「日本史探訪」が高視聴率をとり、またその内容を編集した本が売れる。あるいは、司馬遼太郎や松本清張の作品がベストセラーに名を連らね、法隆寺建立の謎や柿本人麿刑死説に関する本もよく売れる。また、折しも発見された高松塚古墳をめぐる論争もはなばなしといった具合であった。大岡が井上靖の『蒼き狼』を批判した六十年を前後とする時期も歴史ブームといわれた。大岡の発言もむろんそのことと無関係

ではなかった。そして、それから数年後に書かれた一連の歴史小説論は、そのようなブームをひとわたり見とどけた後の発言だったといつてもよい。今回の発言もおそらくはそれと同じ事情があつたであろう。

しかし、その直接の動機となつたのは、菊地昌典の歴史小説論であつた。菊地は同じ年一九七四年の二月、三月、四月の三回にわたり、『展望』に「歴史小説とは何か——史実と虚構の間——」を發表した。これは、大岡以後はいふまでもなく、おそらく岩上順一の『歴史文学論』(中央公論社、42・3)以後、大岡の論と並ぶ最も詳細かつまとまつた歴史小説論といつてよい。しかも、歴史学者の発言という珍しいケースでもあつた。菊地の論がなければ、おそらく大岡が発言することは、少なくともあのような内容の発言をすることはなかつたであろう。というのは、井上靖との論争やその後の一連の歴史小説論における主張や問題意識とはほとんど無関係のように再び訪れた歴史ブームに、むろん大岡はいらだちを覚えていたであろうが、しかし大岡には十年前とほぼ同じようなことをくりかえし発言する気持ちにはやなかつただろうからである。歴史ブームなどというものはそのような形でしかあり得ないことを、大岡はすでに十年前に思い知らされていたことであろう。そもそも、前の歴史ブームと今回のそれはいわば地続きのようなもので、ほとんど切れ目なく続いてきたといつてもよいのであつた。その意味で、歴史ブームなどというものは、出版界を中心としたマス・コミによつてなかなかでつち上げられたものであること、おそらくそのことにも大岡は気づいていたにちがいない。

大岡昇平はそのほぼ一年前、「歴史小説の方法 文学者の立場から」(『朝日新聞』、73・4・9)という文章を書いている。これは、同年同誌に發表された和歌森太郎「歴史小説と歴史 史学者の立場から」(『朝日新聞』、73・3・26)に反論したものである。第二次『蒼き狼』論争と菊地が呼ぶこの論争は、和歌森による『蒼き狼』論争における井上

の主張のむしかえしという点では、確かにそう呼んでもよいものだった。しかし、それは決してそれ以上のものではなく、大岡の反論もほぼそのときの反論のくりかえしに終わらざるを得なかったのである。大岡にもしその気があったならば、ここで然るべく当時の個々の状況に則して再び歴史小説論を展開することもできたのである。

菊地昌典の論の登場は、大岡に再び歴史小説論を書かせる気にさせたという意味においては、確かに幸福なことだったといえるだろう。しかし、菊地の論にとびついたこと、とびつくしかなかったという点では、それは大岡にとつてもそしてわれわれにとつても必ずしも幸福なことではなかったといわざるを得ない。菊地の論は、大岡自身の論と十分に拮抗し得るような、あるいはそれによつて自らの論を鍛え上げ得るような実質を持ったものでは決してなかったからである。いや、むしろ菊地の論は、大岡以前の歴史小説論のひとつの典型を表わしていたといつてもよいのである。

大岡の論に入る前に、まずは菊地昌典の論をひととおり見ておきたいと思う。それによつて、大岡の論の意味もより鮮明になる部分があると考えられるからであり、また、それまでの歴史小説論の基本的な在り方もあらわになると考えるからである。

菊地昌典の歴史小説論

まずは、いわゆる『蒼き狼』論争についての見解から見ていくことにする。『蒼き狼』論争は当時話題になった論争であったが、まともにとり上げ論じられることはなかった。そのことが、数年後大岡がみずから一連の歴史小説論を

書くひとつのモチーフともなっていたと考えられるのだが、しかしその発言以後も、本格的に論じられることはほとんどなかった。菊地の論は、『蒼き狼』論争に関する数少ない論のひとつといつてよい。¹⁾

菊地昌典は歴史家という立場から、基本的にはこの論争を、「じつは歴史家にとつて大変、重大な問題を提起していた」(第二章『蒼き狼』論争)と捉えている。それは、「『元朝秘史』を例にとつての史実とはなにか、という問題であり、そして、さらに史実と史実の間に、井上靖の言葉をかりれば、はいつていくことが、歴史家に必要なのか、どうかという問題、そして主人公の心理洞察という点である」というのである。さて、そのような問題意識に立つて菊地は、大岡、井上双方の対立を端的にこう結論づけている。すなわち、「大岡がいたいのは、史実にもとづいたイマジネーションの限界と節度ということであり、それに対して、「井上靖の反論は、結局、この大岡の設定した「或る程度の限度」そのものに対する反論ではなくて、その許容量の問題として終始してしまった」のだと。「これでは、論争になりようがなかった。」と菊地はいっている。

私は卒直に、このものいいに對して驚きというよりもむしろ当惑を感じざるを得ない。というのは、このものいいは語のごく普通の意味においてそもそも意味不明といわざるを得ないからである。つまり、井上がもつぱら問題にしていたと菊地がいう「許容量」と、大岡のいう「或る程度の限度」、あるいは菊地がいかえていうところの「限界」「節度」とは、対立する別のものとはとうてい捉えられず、せいぜい同じことの見方を変えただけのものにすぎないのしかいようがないからである。したがって、「これでは、論争になりようがなかった」どころか、それならば十分論争になったはずだという外はないのである。仮にそれらに何らかの差異を見つけるとしても、それは決して論争になりようがない次元の差にはなるべくもないであらう。

それにしても、菊地は何故このような意味不明の言辭を弄することになったのだろうか。その本当のところはまさに理解を越えているのだが、ただいえることは、『蒼き狼』論争における大岡の発言に対する菊地の理解が根本的なところであやまっていたということであり、そのことが混乱をもたらしたひとつの要因ではあったろうことである。先の引用にあるように、大岡が引いたかっかとして菊地が述べていた「限界」「節度」とは、「イマジネーション」のそれであった。しかし、菊地が引いていた大岡の「或る程度の限度」とは、そのような意味ではなかつたのである。

歴史小説は近代の産物で、歴史的人物を人間的に書くのを原則とする。人間とは無論現代人であるほかはないが、現代的動機のために、歴史を勝手に改変していかうと、そうは行かない。

小説家はその人物を現代にはもはやない条件の間におくことによつて、異常な葛藤の中に投げ込み、欲望を解放することが出来るが、それは読者の側の、昔は勝手なことが出来たらしいという錯覚に助けられているにすぎない。しかし、歴史的事件や人物に関する限り、ある程度の限度は存在するのである。(「蒼き狼」は歴史小説か——常識的文学論(1)——「傍点は引用者。」)

わかるように、大岡がいつているのは要するに歴史の改変の「限度」ということである。しかもそれは、「歴史的事件や人物」に関するそれであつた。つまり、実際の事件や人物をなかつたことにしたり、反対に架空の事件や人物があつたことにしたりすることには、おのずから「限度」があろうというのである。これはイマジネーション云々ということとは全く別のことである。菊地も実はこの大岡の発言を引用していたのだが、明らかにそれをイマジネーション

ンのそれと捉えてしまっていたのである。因に言えば、初出の『群像』には傍点を付した部分の記述はなく、その部分には「はじめて可能なのである。」といういい方で終わっているだけである(傍点の少し前にある「錯覚」も「歴史的先入観」となっている)。すなわち、「ある程度の限度」ということはなかったたのである。それが加えられるのは、単行本『常識的文学論』(講談社、'62・1)においてである。論争を扱うにはやはり初出本文によるのが筋であろう。それはともかく、考えてみれば大岡はずいぶんと控え目な要求をしていたといえる。菊地は、「明らかに大岡は、歴史小説にきびしい枠を設定している。」と語っているが、それはイマジネーションの「限度」と勤ちがいでいたからに外ならない。

「イマジネーション」(想像力)とは、菊地昌典の論全体に類出するいわばキイ・ワードともいうべきことばだが、『蒼き狼』論争において大岡は、このことばをほとんど全く用いていなかった。ただ一度だけ、しかも井上靖の態度を否定的に述べたところで用いていただけである。「たゞ私は氏の想像力が、『蒼き狼』のように歴史に反してではなく、乏しい史実に添って動いているらしいのを認めただけである。」(成吉思汗の秘密——常識的文学論(3)——)と。菊地の発想は、大岡のそれとは根本的に異なっていたのである。そして、それはむしろ井上の方に近かったといつてよい。菊地は井上の論について次のように述べている。

　　いふならば、歴史家はイマジネーションに禁欲的でなければならぬが、作家は、史実と史実のあいだにわけいつて、自由奔放にイマジネーションを働かせうる権利をもつとの考えである。(第二章『蒼き狼』論争)

むろん、これは否定的な意味でいったものである。井上靖もイマジネーションあるいは想像力ということばをあまり用いていなかったが、しかしここでの菊地の捉え方は基本的にはまちがいはない。菊地も引いていたが、井上は、「小説家の歴史に対する対い方は、歴史学者の解釈だけでは説明できないところへはいつて行き、表面に見えない歴史の一番奥底の流れのようなものに触れることではないか。」「文学作品である以上、作者は史実と史実の間にはいつて行かなければならぬ。」「自作「蒼き狼」について——大岡氏の「常識的文学論」を読んで——」といったからである。菊地の井上に対する批判は要するに、イマジネーションを働かさなければならぬのは何も作家だけではなく、その点では歴史家も同様なのであつて、歴史家が「イマジネーションに禁欲的でなければならぬ」というわけでは決してないということであつた。むろんその際には「自由奔放」に働かせていいわけではなく、それは作家もまた同じであるというのである。ただ、井上は「自由奔放」であつていいといつていたわけではなく、「史実と史実の間にはいつて行かなければならぬ」といつていただけである。菊地に見当はずれがあつたとすればその点だけである。いづれにしろ、菊地と井上の考えは確かに対立している。しかし、イマジネーションということを問題にしているという意味では、二人は同じ発想の地点にいたといつてよいのである。菊地と井上の対立こそ、まさにイマジネーションの「許容量」の問題であつたといふべきであろう。「私は氏の歴史小説というものに対する考え方を、ひどく窮屈なものに感じる。」という井上の大岡に対する発言は、先の菊地のいい方とまさに符節を合わせたごとくであろう。

ところで、「イマジネーション」とともに、菊地昌典の論全体におけるもうひとつのキイ・ワードとなつていたのは「史実」ということばであつた。

ふつう、われわれが史料にもりこまれた史実という場合、傍証によって確認された動かしがたいものをさすのであるが、傍証しようなない場合、それは、歴史家の史観によって秩序化され、あるいは打ち棄てられていく。とりわけ、現代史においては、史実は多面的であり、錯綜し、ときには真実と虚構とのアマルガム状の史料も、けつして少ないわけではない。とりわけ、人間を歴史の中軸にすえると、その人間の精神構造は、日記、記録、書簡ではうかがいしれない暗部をひそめていることが屢屢である。むしろ、これら史料は、残されていることによって史実を混乱させる役割さえはたすことが多い。かりに、史実をア・プリオリに事実そのものと考えても、その史実と史実をつなげる媒体は、やはり歴史家のイマジネーション、あるいは史観しかありえない。その史実の構築のしかた自体が、そっくり、史観に忠実にしたがったモデル・ハウスがおおいのも、そのせいなのである。史実をくみためる青写真が、史観というモデル・ハウスなのである。(「第二章 『蒼き狼』 論争」)

ややわかりにくい文章だが、菊地はここで一応、「史料」と「史実」と「事実」の三つを区別していることがわかる。「史料」が、「史実」あるいは「事実」とは別のものであることはいうまでもない。しかし、菊地は「史実」と「事実」をも区別している。「かりに、史実をア・プリオリに事実そのものと考えても……」と述べているからである。「史実」と「事実」は同じではない、「史実」は必ずしも「事実」ではないとはどういうことなのであろうか。

先にも見たように、菊地の論には、少し注意して読むと意味不明となるものいいが少なくない。要するに少々雑なのである。たとえば今引用した最後の部分でも、「史実をくみためる青写真が、史観というモデル・ハウスなのである。」と述べているが、よく考えれば「青写真」を何故「モデル・ハウス」といつているのがよくわからない。モデル・

ハウスでも何でも、家を建てるためにあらかじめ必要な設計図が普通は青写真であろう。これは揚げ足とりのように聞こえるかもしれないがそうではない。その前の文で、「史実の構築のしかた」が「史観に忠実にしたがったモデル・ハウス」であるといっているからである。つまり、ここでは「史実の構築のしかた」が「モデル・ハウス」だといっているのであって、「史観」はいわばそれをたてるためにしたがうものだといっているのである。このいい方自体いまひとつ理解に苦しむが、ともかくこの文脈に則せば、最後の文は、史実をくみたてる青写真が史観なのである、といういい方になるはずである。つまり、「史観」は「モデル・ハウス」ではなく、「青写真」なのである。

「史実」ということばもやや混乱して使われている。引用のはじめで菊地は、「史料にもりこまれた史実」はそれが「傍証しような場合」には「打ち棄てられ」ることがあると述べている。また、「史実は多面的であ」るとも述べている。他のところでは、「史実の信憑性」（第二章『蒼き狼論争』）、「史実の一面性、不完全性」（第一章 歴史と文学の断絶）といういい方もしている。ここでいわれている「史実」とは、要するに史料における事実、すなわち史料において事実として記されている事柄という意味であろう。つまり、われわれが史料を根拠として「史実」と呼ぶところのものといった意味であろう。だが、いうまでもなく史料には端的にいつて嘘が書かれていることもあろうし、そうでなくてもいわゆる事実を捉えそこなっていることもある。だから、「史実をア・プリオリに事実そのもの」とはいえないのである。しかしそれならば、それをことさらに「史実」と呼ぶ必要はどこにあるのだろうか。史料といつていつこうに差しつかえないのではないか。「史料にもりこまれた史実」といった一見トートロジカルない方をする必要はなくてただ史料といえればいいし、史料はア・プリオリに事実そのものではない、といった方がはるかにわかりやすいであろう。菊地は何故、「史実」にそのような意味を持たせていたのであろうか。それはおそらく、イマジネー

ションということと無関係ではない。

菊地昌典はこの論の冒頭、「バターと玉子、そしてサラダとパセリがオムレツではない」(第一章 歴史と文学の断絶)という、リットン・ストレーチイのことに言及していた。これは、桑原武夫が好んで使っていることばでもあり、菊地もそれに共感している。「バター、玉子、サラダ、パセリは、この場合、「確実」な史的事実(史実)をいい、オムレツは歴史である。どんなに史的事実をつみ重ねていっても、それが歴史になるものではない。」というわけである。不適切とはいわぬがあまりうまくも思われない比喻であるが、その主張には基本的に異論はない。しかし、それに続けて「その史実を料理して、オムレツにするには、芸術的直観が必要だということ、換言すれば、歴史家は詩人でなければならぬ」といういい方に接するに、やや鼻白む思いがしなくてもない。ただ、菊地の問題意識に則せば、それはバターや玉子、サラダやパセリを集めればすぐオムレツが出来あがつたかのように、材料集積に狂奔している歴史家に対する強い反発をこめた故意の挑発的なものいいであつただろう。それはともかく、要するに「史実を料理して、オムレツにする」ために必要なのが、一言でいえばイマジネーションだということである。つまり、イマジネーションによって史実と史実に脈絡をつけ関係づけることによって、はじめて歴史は成立するといっているのである。だから、史実はいわばそれだけでは意味を持たず、その意味でそれは事実ともいえないといのであろう。菊地が、「史実の断片」あるいは「史実の切片」といういい方を頻繁にしているのもそのためであらう。

菊地は、要するに「史実」を、いわば歴史を構成する単位として捉えているといえる。オムレツの比喻にわが意を得たりとしたのもそのためであらうが、しかし、史実をそのように捉えなければならぬ必然はどこにあるのだろうか。イマジネーションによって脈絡をつけ関係づけられることによってできた歴史も、また史実と呼んで不都合な理

由は何もないであろう。菊地は、「史実」をやはり史料というニュアンスで捉えていたといわざるを得ない。もちろん菊地は、「史実」をいわゆる普通の意味における史実という意味でも使っていたし、菊地の文脈に則せば明らかに史実となるべきであろうところにも「事実」ということばを用いてもいた。したがって、「史実」を「史料」や「事実」とことさらに區別して用いる必然は、いわば二重の意味でなかつたのである。

さて、菊地はイマジネーションを働かせるためにはもうひとつ「史観」が必要だと述べていた。先の引用の部分では、述べたようにそのへんのところやや混乱しており、「イマジネーション」と「史観」を並列的にあるいはイコールとして捉えているようにもとれるのだが、菊地のいいたいことは要するに、イマジネーションはそれ自体でいわば自由勝手に働くものではなく、史観があつてはじめて、しかもそれに基づいて働くものだということである。だから、イマジネーションの働きにはすでに史観が刻みつけられているともいえるし、その働きはいわば史観の表明であるともいえる。ただし、「史観」は、単に「史実をはめこんでいくだけ」のいわば固定的なものであつてはならず、「史実」によつてたえずうちなおされるべき」(第二章『蒼き狼』論争)ものだと菊地は述べている。「史観とは、史実を釣りあげる営為であるとともに、史実によつてたえず補正される被動的歴史認識たりえなければならぬ。」(第七章「史実と史実の間」というのである。「……なければならぬ。」というのは、むしろそうでないばあいがおうおうにしてあるからであり、そのような在り方に対する強い反発が菊地にはあつたのである。

これは極めてまっとうな指摘というべきであろう。ただ、「史実によつてたえずうちなおされ」あるいは「補正される」にしても、「史観」とはあるひとつの観方であることに変わりはない。それは、つねにイデオロジカルだとはいわないまでも、ひとつの評価軸の設定であることにちがいはない。たとえば、菊地はバターや玉子、サラダやパセリを

いくら集めてもだめだ、どんなに史的事実を積み重ねても歴史にはならないと述べていたが、実はそのような行為にも史観は働いているというべきであろう。何故なら、バターや玉子、サラダやパセリは明らかにオムレツの材料だからである。マヨネーズやワイン、魚やダイコンを集めているというわけではないのである。史的事実を積み重ねるにしても、いわばその選び方や積み重ね方があるのであって、それがまた決して歴史にはならないとは限らない。更にいえば、菊地のそのような考え方自体すでにひとつの史観ともいえるだろう。

本論の(一)で述べたように、『蒼き狼』論争において大岡昇平は、史観ということばを二つの論でそれぞれ一度ずつ用いていた。それは明らかに肯定的な意味で、しかも相手を攻撃するために用いていた。しかし、その後の一連の歴史小説論においては、そのことばをほとんど全く使っていない。ただ一度だけ、しかも否定的な意味で使っていただけであり、それは歴史哲学ということばと並称されて用いられていた。大岡は、歴史哲学をたえず否定的な契機において取り上げ、史観もほぼ同じ意味として捉えていたのである。もちろん、大岡はいわば全ての歴史哲学や史観はだめなのであり、持つべきではないと考えていたわけではない。それらが多種多様に存在するのは当然のことであると考えていたし、何故そうなるのかという説明も行なっていた。そして、そもそもそれらがなければ歴史を認識することもできないこと、したがってそれらにはあくまでもひとつの観方にすぎないがそれによるしかないこともむしろ大岡は認めていた。ただ大岡は、それらはたえず政治的あるいは思弁的理由から生まれてくるものであること、そのことを自覚しなければならぬと戒めていただけである。そして、大岡が強く批判していたのは、そのような歴史哲学や史観によって歴史小説を評価すること、少なくともそれによって作品を裁断するようなやり方に対してであった。それは、いろいろなちがった観方から作品を眺めてみなければならぬという、いわゆる相対主義を主張しているの

ではない。そんなことをすれば、作品は分裂しかねないであろう。そうではなく、歴史小説をあくまでひとつの作品として、歴史小説としての表現の在り方を分析することである。「蒼き狼」論争において行なっていたのも基本的にはそういった方法であり、ある歴史哲学や史観をもって『蒼き狼』を否定していたのではなかったのである。はじめの論で大岡は、井上に対して「史観を持たねばならない」と述べていたが、それは、ひとつの史観すら持たない『蒼き狼』という作品に対するいわばその分裂を批判していたのである。

菊地昌典は、史観とはひとつの観方にすぎず、しかもそれは大岡のいうようにたえず政治的あるいは思弁的側面があることをおそらく理解していた。ばかりでなく、史観を決して固定的なものとしては捉えず、史実と拮抗しながらたえず変化するいわば流動態として捉えていた。しかし、菊地は具体的な作品を評価する際には、結局史観でもって、しかも極めてイデオロジカルに評価してしまっていたのである。それが最もよく表われているのは、森鷗外の『大塩平八郎』と『堺事件』に対する評価である。

この二作は、「ともに」事件を中心にすえ、人間集団を事件に纏綿させ、一つの緊張した動乱の小宇宙を歴史小説としてえがこうとしたもの」（第五章 作家の歴史観）として、他の鷗外の歴史小説と性格を異にしていると菊地はいう。その点で、一応この二作を他の作品よりはすぐれたものとして評価しているのだが、しかし、菊地は結局『大塩平八郎』を否定し、『堺事件』を評価する。それは、「集団のえがき方」の点で前者は「破綻」し、後者は「見事な成功をおさめている」からだというのである。これは、今引いたばかりのものいいと一見矛盾しているようにも見えるが、それはともかく、菊地はそのような事態になった理由を次のように述べている。すなわち、『堺事件』が成功したのは、「この事件の主人公である土佐藩の兵卒群像が、鷗外にとつて賞讃に値する体制へ身をすりよせた下級兵卒

団だったからである」というのである。つまり、「鷗外による、これら土佐藩兵卒たちの行動の全的肯定こそが、集団としての形象を躍動させることに成功させた原因なのだ」と。それに対して大塩平八郎をとりまいていたのは「秩序なき雑兵、反権力志向の群衆」であった。「富豪と米商の収奪を指摘しながら、民衆の覚醒しないのをなげき、その暴力行使に顔をしかめ、「未だ覚醒せざる社会主義」となげく、その格好よさのなかに、鷗外が国家権力への反乱をテーマにえらんだ致命的な誤まりと、その失敗の要因がかくされていると云って差支えない。」というのである。

菊地は「集団のえがき方」といつているように、一見作品の表現を問題にしているように見える。しかし、一方が「破綻」し一方が「見事な成功をおさめている」というその具体的な表現の分析は行なわれていない。菊地は決して作品の表現の在り方を問題にしていたわけではない。菊地が問題にしていたのは、要するに作者の史観あるいはイデオロギーがいかに作品のできを規定するかということだったのである。「体制の中に首までひたりこみ、天皇と乃木にほれこみ、老公山県の声咳に一喜一憂し、旧藩主に伺候する鷗外が、権力に対する反乱を書きうるはずはなかった」(「第四章 事実とイマジネーション」と菊地はいつている。この、あまり品がよいとはいえないものいいが、菊地の基本的な発想だったのである。

それでは、菊地は全体として森鷗外の歴史小説のどのような点を評価していたのであろうか。菊地は、近代の歴史小説において鷗外のそれを総体として最もすぐれたものとして捉えていた。一言でいえばそれは、「歴史の史実を尊重すると共に、過去を過去として正確に復原」(「第八章 「歴史其儘」考」)している点であった。だから、鷗外の歴史小説は「史実そのもののもつ重みをもって、われわれに迫ってくる。」というのである。そして、その比較上言及されていたのが芥川龍之介と菊池寛の歴史小説であった。彼らの作品は「現代人によるその心理の過去への適用」(「第三

章 歴史小説と借景小説」であり、それに対して鷗外の作品は「つとめて、ある時代のある心理に忠実ならんとして」いるという。要するに芥川や菊池のものは、過去という時代背景だけを借りてきているにすぎず、そこに登場してくる人物は現代人に外ならない。したがってそこに描かれているのはあくまでも近代的なテーマだといっているのである。だから、それは厳密にいえば歴史小説ではなく、いうならば「借景小説」ともいうべき現代小説だと菊池はいつている。

ごく大雑把だが、以上が鷗外の歴史小説に対する、ひいては近代の歴史小説に対する菊地の基本的な見方である。このような見方が、ひとつの対比的構図としては一面である正しさを持ちながら実はほとんど意味のないこと、少なくとも近代の歴史小説全体を捉えるための、そして鷗外のいわゆる歴史小説や史伝を評価するための構図としては全く意味がなくはつきりあやまりであること、それは本論の(一)においてその一端を示しておいた。また、それは以後の論においてやがてより明らかになるであろう。ただ、付言しておくならば、そのような見方は実は菊地の独創であつたわけではなく、その意味でそれは菊地だけの錯誤であつたわけではない。菊地自身、吉田精一や三好行雄あるいは臼井吉見の言を肯定的に引用していたように、それはそれまでのいわゆる通説だったのである。因にいつておけば、独創でないということでは『大塩平八郎』に対する評価も、それ以前に石川淳や中野重治の評価があつた。菊地にやや独創的なところがあつたとすれば、それは『堺事件』評価だつたといえなくもないが、それも基本的には以前の見方を変えたわけではなかつた。そして、この作品についてはまもなく大岡昇平が衝撃的な批判を行なうことになるのは周知のとおりである。

菊地の論には、なお子細に検討を加えれば批判すべき点が多々ある。だが、これ以上関わる必要はもはやないであろう。その基本的な主張はおおよそ以上見てきた点に尽きる。しかし、最後には是非述べておかなければならないこと

がある。それは、信じられないことだが、大岡の一連の歴史小説論に菊地は一切言及していなかったことである。菊地にとって大岡の論はいつたい何だったのだろうか。菊地の論が大岡以前の歴史小説論にとどまらざるを得なかったのも、けだし当然のことであつたといふべきであろう。

菊地論に対する見方

大岡昇平は「歴史小説の問題」の冒頭、一九七〇年を前後するいわゆる歴史ブームについて触れた後、すぐさま菊地昌典の論に言及している。菊地のような専門の歴史家が正面から歴史小説を論じたのは、一九五四年、服部之聰の『夜明け前』論以来ではないだろうかと述べ、菊地の論の出現を歓迎している。「ところが今月の文芸雑誌にはこの長い力作論文について論じた論文は、一つも見当らない。」と大岡は不平をもらしている。せっかく出た歴史家によるこの「力作論文」が、かつての自己のときのようにまたもや無視されやり過されるのではないか、という懸念がこのとき大岡に起つたとしても不思議はない。ただ、菊地の論が完結したのは四月、大岡の論の発表は六月で、その間わずか二カ月にすぎない。その意味で、それはやや性急な判断だったともいえる。そして大岡も述べているように、現にその時点で鶴見俊輔、蓮実重彦、田村栄といった人々が、それぞれ菊地の論に触れた文章を書いていたのである。もつとも、これらは全て「時評」であり、いずれもごく簡単に述べられていただけで、大岡の望んでいたようないわゆる「論文」ではなかった。しかし、「時評」においてこれだけ取り上げられることは、この時期としてはむしろ十分に反応があつたといふべきであろう。菊地の論は、いわゆる評判になつた論ではあつたのである。大岡の論もむしろその

反応のひとつであり、またそれが菊地の論の評判をより大きなものにしたことはいうまでもない。歴史家が小説を論じるといふもの珍らしさもあつたであろうが、一般にはいわば専門外の小説読みとして菊地が注目されたのは確かである。論発表の翌一九七五年四月から『季刊歴史と文学』において、かたや歴史小説、時代小説批評の専門家尾崎秀樹との対談が開始されるのも、そのためであろう。それは「異色対談」と銘うたれ、「歴史文学を斬る」と題して一九七九年四月まで、十四回にわたつて連載された。毎回一人の歴史小説作家を取り上げ、その作品を論じていつたのである。

しかし、菊地の論を、歴史小説論として理論的に検討した論はその後も出なかつた。その意味で大岡の懸念は當つてしまつたともいえるのだが、しかし大岡自身、「歴史小説の問題」においてそれを行なつていたわけではない。大岡が菊地の論についてやや詳しく述べていたのは、司馬遼太郎と松本清張の作品に対する見解についてであつた。「今日「坂の上の雲」を耽読する「庶民」が、一九三〇年代に吉川英治の「宮本武蔵」を読みながら日本のファッショ化に追隨した「国民」と同じ道を進んでいないか、との危惧があるようである。」と菊地の問題意識をさぐり、「司馬||松本のベストセラーによつて誤つて表象されている庶民の実体を描き出すことに、現代の歴史小説の任務があるのではないか、というところまで、菊地氏の論旨は進む。」と述べている。これは「極めて適切な指摘であると思われる。」と大岡は評価するのである。ただ、大岡はひとつの疑問を投げかけてもいた。「管理社会下の「庶民」は、一九三〇年代にやすやすと軍の宣伝に乗つて聖戦にかり出された「庶民」と同じであるといえるかどうか」と。つまり、司馬遼太郎の『坂の上の雲』や松本清張の『昭和史発掘』といった、やたらと長くしかも史料考証やドキュメンタリーの要素が強い作品を読むのは、もはや菊地のいうような「庶民」ではないといふのである。それらの読者は、「管理社会が

生み出した大量の「職についた知識層」はたまた「教養を積んだ中間層」であつて、「これを「庶民」と呼ぶならば、子捨て、子殺し、蒸発を強いられている別の多数者を何と呼ぶべきか。」と大岡は述べている。ここに、一九三〇年代とは異なる今日の問題があるというのである。

大岡昇平が菊地の論について直接評価を下していたのはほぼこれだけだつたといつてよい。そして因に言えば、実はここでいつていたような事柄は、その連載がはじまる前月の一月、『月刊エコノミスト』に発表された「司馬遼太郎と松本清張の世界」において、基本的にはすでに述べられていたことであつた。それ以外の様々な見解について大岡は、具体的にはほとんど何らの検討も行なつてはいなかつたのである。しかし、それはある意味で仕方のないことであつたともいえる。すでに見てきたように、菊地の論はそれを理論的に検討するにはあまりにもお粗末であつたといわざるを得ないし、また近代の歴史小説全体を捉える枠組みもそれ以前のいわゆる通説と基本的に変わるところがなかつたからである。「この長い力作論文について論じた論文」が、「一つも見当らな」かつたのは、あながちまわりの人々の問題意識が欠如していたためばかりではなかつたのである。

ただし、大岡の論には、おそらくは菊地のものいいを意識しての発言であらうと思われる箇所がいくつかある。そのひとつは、菊地の論に言及した後に関口一番述べられていた次の発言である。

井上氏と私との論争の焦点は、歴史小説の中の、史実の変更の許容度を中心としたものであつたが、……。

大岡は「許容度」ということばを使っているが、これは明らかに菊地のいう「許容量」をまねたい方であろう。

しかし、この短かい文章でいつていることは、菊地のいつていたこととはほとんど全く別のことである。先に見たように、菊地のいう「許容量」とはイマジネーションのそれであった。そして、それを問題にしていたのは井上だけだったと述べているのである。しかし、大岡はここでもはつきりと「史実の変更の許容度」と述べ、しかも井上も自分も結局はその「史実の変更の許容度」を問題にしていたのだといっているのである。大岡は、「許容量」といういい方をいわば逆手にとつて、菊地の捉え方を批判していたのである。もつとも、菊地のいつていたことそれ自体、実は意味不明ない方だったのだが。

さて、もうひとつは次のものいいである。

歴史小説論が混乱するのは、史料を扱う時、歴史家と歴史小説家に、原則的にはあまり差異がないことによる。その際働くものが、歴史家では科学的な想像力であり、小説家では人間的な想像力である、といわれることがある。しかし、むしろ職業的に歴史的理想力と小説的理想力とに分ける方が適切ではないかと思われる。

すでに述べたように、大岡は『蒼き狼』論争において「想像力」ということばをほとんど全く用いていなかった。そして、それは後の一連の歴史小説論においても変わらない。大岡がここで想像力ということについて述べているのは、明らかに菊地のものいいを意識してのものであっただろう。「史料を扱う時、歴史家と歴史小説家に、原則的にはあまり差異がない」というのも、そして「科学的な想像力」、「人間的な想像力」といういい方に疑義をさしはさんでいるのも、ほぼ菊地の論に沿ったものいいといつてよい。しかし大岡は、結局「歴史的理想力と小説的理想力とに分

ける方が適切ではないか」と、そこにあくまでもちがいを見出ししている。引用部分のすぐ後には、「想像力がそれから行なう記述を予想して働く、その働きの差を考える方が自然ではないだろうか。」と述べてもいる。菊地は、歴史家のイマジネーションと作家のイマジネーションはその働きの点で本来的にはちがいが無いということを強調していた。歴史家のイマジネーションはあくまでも「科学的」なそれだという考えに対して菊地は、「科学的イマジネーションと詩人的想像のちがいを指摘することは、闇夜に鳥をさししめすと同様に困難なことではないのか。」(第四章 事実とイマジネーション)と述べていたのである。

ただ、先の場合とはちがって、大岡はそのことに特にこだわっていたわけではない。何故なら、「歴史的想像力」と「小説的想像力」のちがいが、あるいはそのように区別することが、歴史小説の問題を考える上で大きな意味があると考へてはいなかったからである。大岡は、基本的には想像力ということの問題にはしていなかったのである。だから、ある意味ではそれはどうでもよいことであつた。

ところで、一九七四年十月の『月刊エコノミスト』に、「歴史・人間・文学」と題した大岡昇平と菊地昌典の対談が掲載されている。「歴史小説の問題」発表後まもなく実現したこの対談は、これまで見てきた大岡の菊地に対する見方、そして菊地の歴史小説(論)理解をいっそうはつきりさせてくれるような興味ある発言が少なくないが、それについていちいち見ていく必要はもはやあるまい。ただ、今述べたことの関わりでひとつだけ見ておきたいのは次のやりとりである。

菊地 そういうときに、事実と事実をつなげていくイマジネーションということになると、それは歴史家のイマジ

ネーションと作家のイマジネーションはどこがどう違うのかという問題になってきますね。

大岡 どう違うのかということより、書き方の違いのような気がしますけど。

大岡は控え目な方ではあるが、イマジネーションのちがいをいったことではなく、「書き方の違い」が問題なのではないかと主張している。これに対し菊地は反論を控え、大岡もまたそれをむしかえすことをせず、この論議はこれで立ち消えの形になっている。ところが、菊地にはこの大岡の発言がやはり気にかかっていたようで、やや後に発表された、「歴史小説とは何か・再論——事実と史観の関係——」（『展望』、76・6）においてその発言に触れている。菊地はまず、「作家と歴史家のイマジネーションのちがいよりも、むしろ同質性を強調し、歴史小説と歴史のちがいは書き方のちがいとしてあらわれると考えているかのようである。」（第九章 史観をめぐる作家と歴史家）とそのときの大岡の発言をふりかえっている。「ちがい」ということばにわざわざ傍点を付し大岡の主張を強調しているが、「と考えているかのようである。」といういい方は何とも頼りない。というよりは、そのような大岡の考えに菊地はやはりいまひとつピンとこなかったたのであろう。そして、わかるようにこの菊地の要約自体すでにあやまりがあった。大岡は、作家と歴史家のイマジネーションの「同質性を強調し」ていたわけでは決してない。菊地は外に、「イマジネーションに執着する大岡のきわめてきびしい歴史小説家としての面目」などといういい方もしているが、どこをどのよう読めばこのようないい方が出てくるのであろうか。「イマジネーションに執着」していたのは当の菊地だけであった。そのような菊地に、大岡のいう「書き方の違い」ということがついに理解できなかつたのである。菊地は結局、苦しまざれに次のように解釈するしかなかつたのである。「おそらく、大岡自身が「書き方のちがいのような気がする」と

いったのは、人間の内面心理の洞察といった、殆んど資料としては残りがたい部分に作家の関心が集中しがちであるということではないだろうか」と。

「歴史小説の問題」において大岡は、いわば直接名前を出さない形で菊地を批判していたことになる。しかも、それは菊地の主張の中心をなすいわば根幹的な部分に対する批判であった。大岡は、菊地の論に大きく刺激されあるいは啓発される場所はおそらくなかつたはずであり、むしろ基本的には批判の対象であつたはずである。それでは何故大岡は、開口一番菊地の論に言及しその論の出現を歓迎していたのであろうか。というよりは、何故大岡は菊地の論をきっかけとして再び歴史小説論を書く気になつたのであろうか。

それはおそらく、菊地昌典が外ならぬ歴史家であつたからであり、しかもその根本的モチーフが歴史家批判にあつたからであらう。菊地には、歴史家が歴史小説を論じないことに対する強い不満があつた。民衆の歴史観のかなりの部分が歴史小説によつて作られていることに対して、歴史家は無関心である。いや、実は無関心をよそおつていたのであつて、歴史家自身司馬遼太郎を読みふけり松本清張に没頭し、それを賛美している。ところが、歴史家はそれをもとに取り上げようとは決してしない。そして、そんなものは読んだこともないような顔をしてせつせと論文を書いている。要するに、歴史家は、歴史小説は小説であつて歴史ではなく、したがつておもしろければよいと考えているのであろう。しかし、歴史家はまさに歴史家の立場から歴史小説を積極的に論じなければならぬというのが、菊地の主張であつた。

大岡が最も共感を寄せていたのは、おそらくこのような考えに對してであつた。しかもそのような歴史家批判が、
当の歴史家によつてなされたことである。そして、菊地は単にそのように批判するだけでなく實際具体的に様々な

作品を、近代歴史小説の全体的視野の中で論じていたことである。それは結局、服部之總もなまなかつたことであり、これをきつかけとして歴史家、作家の双方からの論議がまき起ってくることを大岡は期待していたのであろう。やや性急にも反応がないことにいらだちを示したのもそのためであるが、大岡としては、自己の論がその呼び水ともなればと考へてのことであつたであらう。菊地の論を正面から批判することはそれからでもできる。とにかくまずは議論の俎上にのせることである。大岡はおそらくそう考へていたのであろう。

しかし、「歴史小説の問題」が書かれたのはむろんそれだけではない。十年前の一連の歴史小説論における考へとは微妙に異なる主張もあるし、また新たな考へもそこでは述べられている。十年のあいだに、大岡において新たな展開が起つていたことも確かである。

新たな展開とその問題点

「歴史小説の問題」には、森鷗外の作品に関する発言が多い。一連の歴史小説論においてもむろん少なくなかつた。ただ、一連の歴史小説論では、日本の歴史小説全体の史的概観を試みていたわけで、鷗外の作品に触れるのはいわば自然のなりゆきだつたといえるし、したがつてまたそれに言が多く及ぶのもある意味では当然のことであつた。その点、「歴史小説の問題」の場合やや異なつていた。ここで言及されていた多くの作品は、鷗外のものを除けばほとんどが同時代の作品か、少なくとも戦後の作品であつた。鷗外の作品はいわば例外的に、しかも多く言及されていたのである。それは、菊地昌典の論が多くそれに触れていたためでもあつたろうが、しかし、大岡昇平にとつて鷗外の作

品の捉え方が依然根本的な問題として存在していたからに外ならない。

大岡は、「歴史と歴史小説の概念の混乱の現状において」「歴史文学の中のジャンルの混淆をある程度まで避け」るためには、それらを「史」と「伝」の二つに分けてみてはどうかという新たな提案を行なっている。「一定の歴史上の事件を描いたものを「史」、一人の人間の生涯を書いたものを「伝」とするものである。そして「人間」は「伝」においては、一貫性の問題であるが、或る歴史的な瞬間における「人間」は、「史」の歴史的記述の文脈の中に矛盾なく組み込まれていけばよい、とすべきではないだろうか。」と述べている。大岡がこのようなことを思いついたものとの根拠になっていたものは、鷗外のいわゆる歴史物の諸作品に外ならない。

鷗外の「史伝」は「歴史小説」とは違ったジャンルを形成すると考えられている。それは対象の扱いが、歴史小説の物語体ではなく、文献の考証や筆者の意見との自由な往来から成り立っているからである。その全体は「歴史文学」または「歴史物」であるが、私は「史」と「伝」とを分ける方がよいのではないかと思う。

鷗外のいわゆる史伝と歴史小説のそれぞれの作品を思い浮かべ、この文章をごく自然な文脈に則して読めば、「史伝」を「史」、「歴史小説」を「伝」といつているように読める。「史伝」の方は「伝」と考えることもできようが、一方の「歴史小説」を「史」とは少々考えにくいであろう。

ところが、先の定義にしたがえば「史伝」が「伝」、「歴史小説」が「史」ということになるであろう。鷗外のいわゆる史伝は、たとえば『渋江抽斎』の場合作品のほぼ半分が、『伊沢蘭軒』では半分以上がそれぞれの人物の子孫の記

述になつていたが、おおよそ「一人の人間の生涯を書いたもの」といつて差しつかえないであろう。また、歴史小説の方も、たとえば『山椒太夫』や『高瀬舟』、あるいは『寒山拾得』といった、「一定の歴史上の事件を描いたもの」というにはやや語弊のある作品もあるが、おおよそそのようにいつてもかまわないであろう。大岡の考えていたのも、結局はこちらの方であろう。では、大岡は何故先のようないい方をしていたのであるうか。というよりは、何故先のようないつていたにもかかわらず、「史」と「伝」をそのように定義していたのであるうか。先のところで大岡は、歴史小説を「物語体」の作品であるとし、それに対して史伝を「文献の考証や筆者の意見との自由な往来から成り立っている」と述べていた。「史伝」を「史」、「歴史小説」を「伝」といつているように読めたのは、そのようないい方にしたがったからでもあるが、これは先の「史」と「伝」の定義とは要するに別のことである。何故このようなことが起つていたのか、それはおそらく、鷗外のいわゆる歴史物の諸作品に対する大岡の微妙な捉え方に関わつてゐる。大岡昇平ははじめに、「鷗外の「史伝」は「歴史小説」とは違つたジャンルを形成すると考えられている。」と述べていた。これは、史伝と歴史小説という鷗外のいわゆる歴史物の諸作品の分け方が、ほとんど自明なものとして一般化していることを、大岡自身おそらくは肯定的に述べたものであろう。しかしそれは、そのような見方をいわばひとつの説として捉えているものいいともいえる。むしろ、大岡にはつきりした異説があるわけではない。しかし、そのような見方に何らかの疑いとまではいわないまでも、何らかのひっかかりを感じていたのでないかと思われなくもないのである。というのは、大岡はそれまでこのようない方を一度もしたことがなかつたからである。更にいえば、史伝と歴史小説ということばに大岡は鍵括弧を付してゐることである。一連の歴史小説論においても、大岡はときに史伝ということばに鍵括弧をつけていたが、必ずしもそれにこだわつていたわけではなく、したがつてそれをつけず

に用いてもいた。あるいは、福地桜痴や山路愛山、それに幸田露伴の作品にも特に区別なく史伝あるいは史伝物というところばを使っていた。そして、歴史小説の方はたえて鍵括弧つきで用いられたためしかなかったことはいうまでもない。

くりかえしているが、大岡はそれまでの史伝と歴史小説という分け方があやまりであり改めなければならぬと考えていたわけではない。しかし、いざそのちがいが、その表現上のちがいをきちんと説明しようとしたとき、それがいまひとつうまく表現できない思いを大岡は持ったのではないか。史料や史実により忠実であるか否かといったいや、あるいは「歴史其儘」かある程度の「歴史離れ」かといったことではなく、あくまでもその表現の在り方のちがいを説明しようとしたときである。大岡は、歴史小説を「物語体」であるとしか述べていなかった。ただ、それはその表現をある程度は説明し得ているともいえる。物語ということばは、それくらいまでに一般化しかつおおよその共通概念を喚起することばだからである。ところが、史伝の方を同様に何と読んでよいのか大岡には思い浮かばなかった。そして、結局は先のように説明するしかなかったのである。しかしその説明は、ごく簡単にその特徴を示そうとしたためとはいえ、あまりにも舌足らずない方だったといわざるを得ない。そして何よりも、それは物語体と呼んだ歴史小説の表現の在り方と対比的なその表現の説明にはなっていないからである。もつとも、物語体とは結局どのような表現なのかを説明してもいかなかったわけであるが。

いわゆる史伝と歴史小説の表現のちがいをこのようない方でしか説明していなかった大岡には、そして本論(一)で見たように、いわゆる「歴史其儘と歴史離れ」といったいい方をそのまま信じてはいなかった大岡には、史伝と歴史小説は一般にいわれているほど異なっていないように見えたのではなからうか。私はそれを決してネガティブな

意味でいつているのではなく、むしろある重要なところに大岡は気づいていたのではないかということを描きたいのである。大岡はいわゆる史伝について次のように述べていた。

時世の変化の中に埋もれた医師考証家の平凡な生活が、その子孫の代まで追求される。その旅行と交友によって、幕末から明治にかけての時間、空間の無い展望が繰りひろげられる。これは鷗外の揺ぎない業績として古典的評価が確立している。

しかしここに美しく描かれている封建的平凡人、及びその延長たる明治の士族が、鷗外が探索家の善意をもつて現わした通りの人間であつたかどうかが追及されたことはない。すべて鷗外の取つた聞き書をそのまま真実と信じ込んでゐる。

まずは前半の部分であるが、ここでもそのものいいがやや気にかかる。つまり、「古典的評価が確立している。」といういい方が、先と同様基本的にはおそらく肯定の立場に立ちながら、やはりそれをひとつの見方として捉えているようにもとれるものいいなのである。更にいえば、「幕末から明治にかけての時間、空間の無い展望が繰りひろげられる。」というのが、はたして評価点といえるのかという素朴な疑問もある。これでは、大岡がはたして史伝を評価しているのか否かがよくわからないともいえるだろう。かつて、一連の歴史小説論において大岡は、史伝についてこう述べていた。すなわち、鷗外の史伝には、「明治的書生文学にはない豊かな社会的地平線の拡がりが生じた。歴史の「自然」についての最も意識的な作家が、その実行の結果において、最も広い社会的展望を開いた。」¹¹（「日本の歴史小説」）

と。この評価がはたして正当か否かということはひとまずおくとして、先の大岡の発言はここから明らかに後退しているとしかしいようがない。大岡における史伝評価は変化したといわざるを得ないのである。

そのことは、後半部分での捉え方とむろん関わっている。大岡昇平は最後に、「すべて鷗外の取った聞き書をそのまま信じ込んでいる」と述べている。注意したいのは「聞き書」ということばで、これはすなわち資料のことをいったものであろう。つまり、鷗外の史伝は「聞き書」といった類の資料を用い、それをそのまま信じ込んで書いているというのである。一連の歴史小説論においては資料については何も触れられていなかった。ここではじめてそれについて述べてきたのは、その間の史伝に関する資料研究の成果によるものであろう。そして、その資料ということでは、いわゆる歴史小説のそれについても触れ、心理描写といった問題と関連して次のように述べていた。

心理は厳密に言えば、人物の言葉としてしか文献にならない。歴史的人物の書簡がフェイシユな重要性を帯びるのはこのためだが、側近者の聞き書きのような同時代の証言も重視される。そういう補強証拠がいくつもあれば、確実の度は強まるだろう。従って明治の実録物以来、多くの同時代のプライベートな手記や写本が、資料として珍重される。

鷗外の歴史小説は、そういう種類の写本を基にして書かれている。

鷗外の歴史小説の資料が全て「プライベートな手記」あるいは「側近者の聞き書き」といった種類のものであるというのは少々乱暴だが、しかしそれは、それらの資料がいわゆる心理描写なども含んだ、先の大岡のいい方でいえば

まさに「物語体」といつてよい類のものであったという意味であろう。先にいつていた「聞き書」というのもそれと同じことである。そうしてみれば、史伝も歴史小説も実は同じような資料を用いていたことになる。そして、そのような資料をもとにしてできていた作品自体、本質的には同様の表現ではないのか、少なくとも同様の表現を含んでいるのではないかと感じていた部分が大岡にはあったと思われる。単行本『歴史小説の問題』では省かれたが、初出の『文学界』では、『渋江抽斎』について「その全体は、五百の講談的、美談（裸のまま風呂場から熱湯を運んで夫の危機を救う）などで、適当に味つけされた、平凡の讃歌といえよう。」（傍点は引用者。）と述べられていた。史伝評価が一連の歴史小説論からは明らかに後退していたのも、おそらくはそのためではなかったか。

ただ、ここで注意しておきたいことは、大岡が史伝として頭に浮かべていた作品は明らかに『渋江抽斎』であった。そして、『渋江抽斎』に限つていえば大岡が述べかつ考えていたであろうことはまさにそのとおりであり、その限りで大岡は極めて重要なところに気がついていたといえるのである。『渋江抽斎』の表現は事実歴史小説のそれと本質的に変わつてはいなかったからである。その点については二、三の論ですでに論証しておいた。³³ 変わったのは『伊沢蘭軒』からであり、その意味でこれまでの歴史小説と史伝という分け方は改めるべきであると考ええる。鷗外のいわゆる歴史物の諸作品は、『伊沢蘭軒』を転換点として前後に分けて考えるべきなのである。

大岡はもちろんそこまで考えていたわけではない。『伊沢蘭軒』以後の作品も『渋江抽斎』と同様なものと見なしていたのであり、その意味ではやはりそれまでの歴史小説と史伝という捉え方にとらわれていたといえる。おおかたの論者と同じく、大岡も『伊沢蘭軒』や『北条震亭』といった作品をおそらくはきちんと読んでいなかったといわざるを得ない。でなければ、史伝の資料を等しなみに「聞き書」の類であるとはいえないことはすぐに気がついたはずだ

し、また先に『洪江抽斎』についていつていたように、「講談的美談」によって「適当に味つけされた」作品と、『伊沢蘭軒』や『北条霞亭』の場合いえないこともすぐ気がついたはずである。

しかし、大岡の論は、それまでの歴史小説と史伝という分け方が実は本質的なものではないことを示してくれてはいたのである。歴史小説を一応「物語体」といい、それに対して史伝を「文献の考証や筆者の意見との自由な往来から成り立っている」といいながらも、結局は「一定の歴史上の事件を描いたもの」と「一人の人間の生涯を書いたもの」とに分けるべきだと述べていたのも、そう捉えていたためであろう。大岡は、史伝と歴史小説のちがいを、たとえば作中の「わたくし」の有無に求めることもできたはずであった。それまでの論においていわばポイントになっていたそのことについて、大岡は一言も述べていなかったのである。それは本質的なちがいはないと考えていたのであろう。

ただ、大岡が考えた「史」と「伝」という分け方が、はたして有効か否かということとはまた別の問題である。たとえば『山椒太夫』を「史」というにはやや無理であろうことは先に述べたが、しかしそれを「伝」というにもまた無理がある。要するにいずれにも分類し難いのである。あるいはどちらの要素も含んでいるというべきであろうか。大岡も全ての作品がきちんと分類できると考えていたわけではない。大岡は、「歴史的叙述には「史」と「伝」がからみ合つて存在する」と述べてさえた。ただ、ある程度の分類は可能であろうといっていたのである。そもそも、全ての作品を明確に区分できる基準などあるはずもなからう。だから、その点に特に問題があつたわけではない。問題があつたとすれば、それは先にも述べたように、その分け方がたとえば「物語体」云々といった表現方法によるそれではなかつた点にある。大岡はおそらくそのことをも心得ていた。はじめに大岡は、そのような分け方によって「歴

史文学の中のジャンルの混淆をある程度まで避け得る」と述べていたからである。すなわち、大岡は「ジャンル」の区別であると述べていたのである。そして、少し後に大岡は次のように述べている。すなわち、そのように「ジャンルを区別することによって、それぞれにおける目標と記述方法が決定されるだろう」と。しかし、その具体的な「記述方法」については述べられてはいない。大岡は結局、その表現方法といった点については具体的な提案をできなかったのである。しかし、「歴史と歴史小説の概念の混乱の現状」にあつて、その「混乱」を避けること、つまりは歴史記述と歴史小説の問題を解決しようとするためには、やはりそれは必要なことであつた。もしそれをつきつめて考えていたならば、『渋江抽斎』と『伊沢蘭軒』以下の作品のちがいにもあるいは気がついたかもしれない。

以上、長々と鷗外に関わつての発言を検討してきたが、それは、この論においてそれが最も重要な点であるからに外ならない。すでに見た、菊地の論を暗に批判していた諸点を加えれば、「歴史小説の問題」における重要な指摘はほぼそれで尽きるといつてよい。あとは、一連の歴史小説論との比較上、そして後の論との関係上いくつかの点をごく簡単に見ておけば十分であらう。

ひとつは、この論においてはいわゆる政治的な発言が非常に目立つことである。

「新平家」と「滋幹の母」の成功は、朝鮮戦争後の特需景気と生活ファシリテイの向上と関連があるう。

一九六〇年代の歴史ブームは、まだわれわれの記憶に新しい。安保闘争の挫折と経済高度成長によって、齎らされた大國意識と、それに伴う歴史回顧のムードと共に、各種の「日本の歴史」が大きな売行を示した。

ところで「徳川家康」は一九五〇年以來「中日」「福日」「北海道新聞」に連載されていたのである。これが一九六七年の完成に近づいた頃、ブーム現象を呈したことに時代の特徴が現われている。(略)この能弁な將軍と無言の君主の対比が、多弁な首相と無言の象徴天皇という現代の体制配置とも合致しているのは、歴史の妙というべきであらう。

一連の歴史小説論においては歴史小説の史的かつ理論的な検討が中心であったのに対して、この論ではいわばそのアクチュアルな面に焦点があつたといえる。はじめに述べたように、この論で取り上げられている作品が、鷗外のものを除けばほとんどが同時代の作品か少なくとも戦後の作品であつたのもそのためであらう。もちろん、大岡にはそのようなモチーフがもともとあつたことはいうまでもない。菊地の論に共感を寄せたのも、つまりはそのような部分に対してであつた。菊地の論も、また極めて政治的な発言の多い論だつたのである。

さてもうひとつは、この論ではいわゆる物語に対する一種の悲観的な態度が見てとれることである。

現在歴史小説といえは主に明治物で、ここは単純な物語り形式では読者が納得しなくなっている領域である。

大岡がこのように考えるようになったひとつの理由には、やはり『坂の上の雲』や『昭和史発掘』の流行があつたであらう。そして更には、色川大吉の『明治精神史』といった仕事が出現したからでもあつた。

ただこれは現実の歴史ではなく、「精神史」の領域である。そしてこの領域はもはや古い物語形式では捉えられなくなっているのではないか。

一連の歴史小説論においては、このようないわば物語の限界といったことには触れられることはなかった。「恐らくこれまでにはわが国で書かれた最もすぐれた歴史小説ではないか」(「江馬修「山の民」」)といっていた『山の民』を、「現在物語体のリアリズムによる最上の歴史小説」というように、明らかにいい方を変えていたことでもそれはわかるであろう。このことはおそらく、その間の『天誅組』(『サンケイ新聞』、'63・11〜'64・9)と『レイテ戦記』(『中央公論』、'67・1〜'69・7)の執筆と無関係ではない。

注

(1) 菊地の外にやままとまった論には次のものがある。

重松泰雄「歴史小説をめぐる論争 井上靖・大岡昇平論争」
『国文学・解釈と鑑賞』、'70・4。

白井吉見監修「戦後文学論争下巻」(番町書房、'72・10)所収「蒼き狼」論争」の、高橋春雄による「解題」。

(2) 以下、「歴史小説とは何か——史実と虚構の間——」における菊地の発言は、『歴史小説とは何か』(筑摩書房、'79・10)所載本文による。なお、引用の際に括弧内に記す章数と標題は、全て本書による。

(3) 以下、『蒼き狼』論争における大岡、井上の発言は、すぐ後に述べる理由から、この大岡の発言のみを『常識的文学論』

(講談社、'62・1)所載本文により、他は全て初出本文による。ただし、旧字は新字に改めた。

(4) 吉田精一『芥川龍之介』(三省堂、'42・12)。

三好行雄「作品解説」(角川文庫『杜子春・南京の基督』(角川書店、'68・10)所収)。

白井吉見「小説の味わい方」(新潮社、'62・6)。

(5) 石川淳『森鷗外』(三笠書房、'41・12)。
中野重治『鷗外——その側面』(筑摩書房、'52・6)。

大岡昇平における歴史(二)

(6) 大岡昇平「森鷗外における切盛と捏造——「堺事件」をめぐって——」(『世界』、75・6)。

同「「堺事件」の構造——森鷗外における切盛と捏造(続)——」(『世界』、75・7)。

(7) 以下、「歴史小説の問題」における大岡の発言は、『歴史小説の問題』所載本文による。ただし、大岡は初出本文にかなりの加筆訂正を行なっている。「蒼き狼」論争や一連の歴史小説論における発言も、単行本所収の際にはかなりの加筆訂正が行なわれていたが、ここではそれらの比ではない。ほとんど別のテキストとはいわれないまでも、大幅な書きかえである。したがって、どちらのテキストを使用するかによって論の展開もかなりのちがいが生じるであろう。しかし、これは論争のテキストではなく、また初出發表から単行本収録までわずかに二カ月というほとんど同時期のものであることから、一応単行本所載本文によることにした。

(8) 鶴見俊輔「歴史より小説が表現 時代の実感をつかんで(論談時評)」(『朝日新聞』、74・3・28)。

蓮実重彦「作品」を語ろうとしない評論(文芸時評)」(『日本読書新聞』、74・4・8)。

田村栄「ソルジェニツィン、歴史小説など(文芸時評)」(『民主文学』、74・5)。

(9) ただ、蓮実重彦のは、次に示すように一蹴のものに否定しきったものであった。

「菊地昌典の労作『歴史小説とは何か』(『展望』2(4月号)が結局は何にも貢献することのない無償の饒舌に陥るほかはないのは「作品」をめぐる概念と方法とがそこにすつぱりと欠落しているからにほかならぬ。」

(10) 以下、「歴史小説とは何か・再論——事実と史観の関係——」における菊地の発言は、『歴史小説とは何か』所載本文による。

(11) 以下、一連の歴史小説論における大岡の発言は、『歴史小説の問題』所載本文による。

(12) 一連の歴史小説論の数年後には、小泉浩一郎が『「淡江抽斎」論——出典と作品——』(『言語と文芸』第47号、66・7)を發表し、「歴史小説の問題」の数カ月前には『日本近代文学大系 第12巻・森鷗外集II』(角川書店、74・4)が出ている。ここで小泉は、『淡江抽斎』の全編にわたる資料との詳細な比較研究を行なっている。

(13) 拙稿『「淡江抽斎」と「伊沢蘭軒」のあいだ——いわゆる歴史物を捉える視点——』(『国語国文研究』第78号、87・9)。

同「鷗外のいわゆる歴史物を分けるもの——筋、論理、そして構成——」(『国語国文研究』第80号、88・7)。

同「五つの短かい作品——鷗外のいわゆる史伝について——」(『国語国文研究』第84号、89・12)。

(14) 初出の標題は「歴史小説に現われた農民」。

前回目次

序

第一章 『蒼き狼』論争

論争の輪郭と問題の所在

『元朝秘史』とその読み

森鷗外の歴史小説(論)理解

第二章 一連の歴史小説論

歴史小説論執筆のモチーフ

史的・理論的考察

『歴史其儘と歴史離れ』の解釈

江馬修『山の民』の評価